

# 来ない年賀状

利根川 裕

年賀状だけのつき合い、というのがあ  
る。そしてそれが、いちばん無理のない、  
長続きするつき合い、という間柄がある。  
一句ある。

賀状うづたかしかのひとよりは来ず 信  
子

こうなると、年賀状に托している思惑  
に、にわかになまぐさい風が吹き寄せてく  
る。

この句の場合、きつと来るはずと待って  
いたのに来なかった、というのではなく、  
来ないにきまっているのに心待ちしてしま  
っている、そういう思いのこもった「来ず」  
であろう。

しかも、「かのひと」があまりに遠くな  
ってしまっただから「来ず」になったのでは

なく、年賀状を出してはいけない、という  
なまなましい禁止を必要とするほどのもの  
がまた燃えつきずにいる、そういう間柄な  
のでもあろう。「来ず」で句をとめたところ  
に、決してまだ時効になっていない心の  
ざわめきが噴きあがっている。

ところで。

飛鳥の山田寺の、回廊の建築資材が、古  
代の面影そのままに、土中から発掘され  
た、というニュースには驚いた。

山田寺の調査がすすめられていたのは知  
っていたし、現に数年前に訪ねたときも、  
かつての遺構の礎石から、往時の伽藍規模  
や伽藍配置が明らかにされていた。

礎石は残る。しかし木造部は朽ちて消え  
る。誰もが、そう思いこんでいたろう。関

係専門家の話だと、土砂崩れで埋まり、し  
かも地下水にどっぷりつかっていたのが、  
朽ち果てなかった奇蹟の礎だ、とのこと。  
水につかっていたから生き残りえた、と  
いうのは、素人考えでは、まるで逆説のよ  
うに聞こえて、この寺の生命力に、神秘め  
いた、あるいは呪術めいた想像がのびる。

山田寺は、もともとは右大臣の蘇我倉山  
田石川麻呂の造営にかかるものだったが、  
彼は天皇家への反逆罪に問われた結果、こ  
の寺で自殺。その後、冤罪とわかって天武  
天皇が寺を完成された由。生きているとき  
の石川麻呂のはらされぬ執念が、木材の一  
部分にのりうつって生きつづけたか、と思  
いたくもなる。

山田寺の結構は、法隆寺にくらべると、

ぐっと小さい。飛鳥の小高い山の裾にあつて、ちょうどあたりの景観とほどよく調和する大きさである。伽藍配置は法隆寺と違つて、中門、塔、金堂、講堂が一線上にある。そして、現存の法隆寺より半世紀も古い木造建築が、ここに建っていたのである。

こんどの回廊郭出土で、法隆寺様式とは違つた往時の建築様式が解明される。その復元の模様を頭で描いてみるだけでも、心がおどる。

もう十年も前のことだが、みちのくの平泉を訪ね、むろん中尊寺の金色堂にも魅せられたが、それよりも私がひきつけられたのは、毛越寺であった。毛越寺は、とっくに廃墟となつてゐる。

かつて芭蕉が、「夏草や兵どもが夢の跡」とよんだとおりの毛越寺である。そこに、大きな礎石は残つてゐる。水をはらんだ池も残つてゐる。しかし往時の堂塔はことごとく滅び去つてゐる。なにもない。

この廃墟に立つと、「夢の跡」の感慨が側々と胸に迫ってくるが、それにもまして、ここに立てられている復元景観図に、

私は心を奪われ、立ち去りかねてゐた。

ここには壮麗な堂塔が軒をならべるように建つてゐた。大きな池には、竜頭鷄首の舟が浮かべられてゐた。なにしろ、極盛期の平安様式を模した、この世の極楽浄土である。

復元図が描きだしてみせる絢爛豪華と、現実の廃墟の荒涼ぶりに、あまりに大きな差があるからこそ、こちらの想像力は際限もなく拡がり、そしてやがて、自分の描きだしてみたその景観に、自分で呪縛をかけられたように動けなくなつてゐた。

その感動は、いつてみれば、ひとつは生あるものの避けえない無常への思いよせであり、と同時に、いまひとつは、滅びた跡を想像のうちに生きかえらせ、呼びよせているといった、生命の連続への思いいれであつた。

ところでもまた。

奈良の薬師寺は、つぎつぎと大がかりな復元を實行してゐる。まだ荒れたままのところ、あの有名な三重塔を仰ぎ見ながら、かつてはここにあつたであろう金堂や、もうひとつあつた三重塔の姿を、幻のなかに描

いてみて、その光景にたつぷりと自分の思いを托してみたことであつた。

いま、その金堂は、幻ではなく現実に建ちあがつた。それだけでない、もうひとつの三重塔も建てられるに至つた。かつて夢幻に托してゐたその景観は、いまや現実のこととして、たしかにわが眼前に展開されている。

しかし、妙なものである。いまの薬師寺は、もう以前ほど私に感動を与えてくれなくなつた。あれほど、復元の光景に憧れを抱いてゐたというのに。

つぎつぎと復元しつつある薬師寺を訪ねると、私は自分の心のパラドックスにとまどつてしまふ。死滅したもののへの痛切な回想があつたからこそ、その復元を願つてやまなかつたのに、いざ復元してみると、かつてさまざまな想いが薄らいでいつてしまつて、雲霧のように心もとなひ嘆きのほうが増してしまふ。

この得手勝手な心のからくりを、どうしたらよいか。

「かのひとり来す」の賀状のほうに、むしろ、やるせない平安というべきなのか。